

# 日本型高大接続の転換 点—高大接続テスト(仮称) を考える—

北海道大学・公共政策大学院・特任教授

佐々木隆生

「高等学校段階の学力を客観的に把握・活用できる  
新たな仕組みに関する調査研究」代表

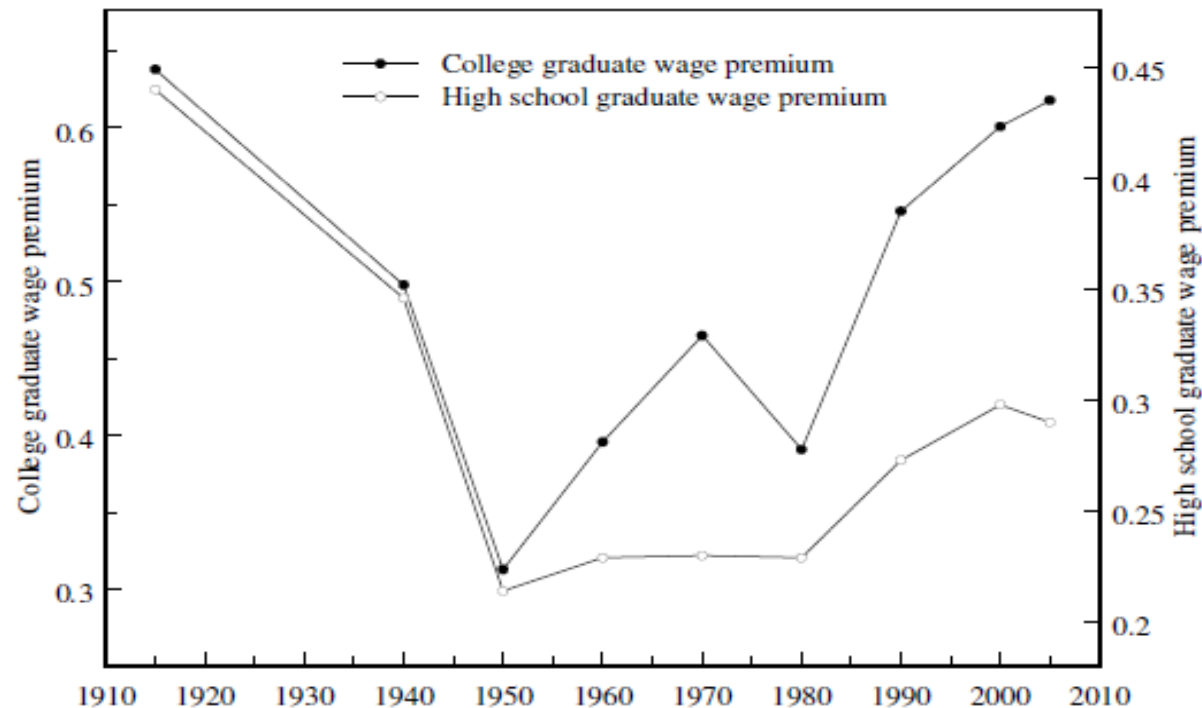
# 教育の危機：高大接続不全

- 日本の大学進学率は**わずか50%強**—先進各国ばかりでなくアジア諸国にも抜かれる状態
- それにもかかわらず高大接続は、「非学力選抜」・「少数科目入試」・「基礎科目履修率低下」などで不全
- 高等教育は「やせ衰え」、高校教育は「底が抜ける」危機

# 知識基盤社会で生じている変化：アメリカ社会の分裂①教育と賃金格差

Autor, Katz and Kearney(2006), Acemoglu(2002)などから

Figure 6: College Graduate and High School Graduate Wage Premiums: 1915 to 2005



# 知識基盤社会で生じている変化：アメリカ社会の分裂②雇用シェアの2極化

Autor, Katz and Kearney(2006), Acemoglu(2002)などから

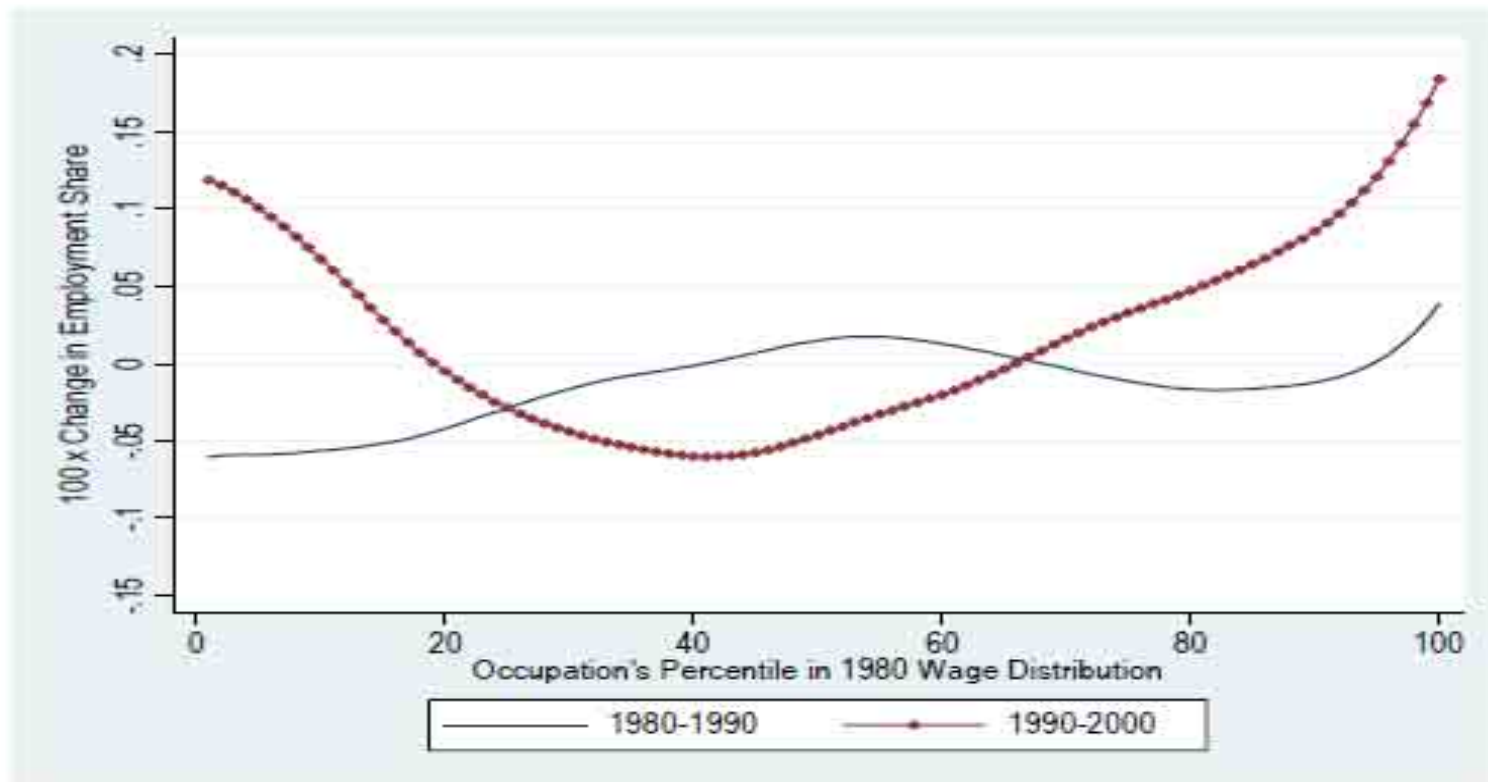


Figure 3. Smoothed Changes in Occupational Employment Shares 1980 - 2000, with occupations ranked by their 1980 Median Wage. Source: Census Integrated Public Use Microsamples, 1980, 1990 and 2000.

# 協議・研究の推移:ボトムアップ

H16-20 国大協・私大連などの問題提起

H20 中教審での検討と答申：協議・研究の必要性

H17から大学入試センター懇談会・文科省入試改善会議で検討

H20 協議・研究開始：国大協、私大連、私大協、全高長、大学入試センターなど22名

# 高大接続の国際比較：接続の2側面と日本の特殊性

	(1) 教育上の接続 ＝学力把握	(2) 進学先選択上の接続＝選抜
アメリカ・欧州	<p>共通テスト</p> <p>①資格試験(バカロレア、アビトウーア、GCE)、②任意の共通テスト(ACT、SAT)</p>	<p>個別学力試験なしの選抜(書類、面接など)</p> <p>別個の共通・個別試験があるのは英仏のごく特殊校</p>
日本	<p>なし(高校卒業は高校長の権限)</p>	<p>①個別学力入試</p> <p>②AO・推薦入試</p>

# 日本型高大接続：構造と基盤

学校教育法第90条：高校卒業＝大学入学資格（昭和22年3月）...理念は「普通教育完成⇒大学」

大学の個別学力試験

⇒①学力把握

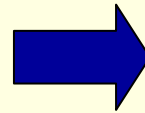
②合否＝選抜

教育上の接続（学力把握）は選抜機能に依存

制度維持の基盤：少なかった進学者と勉強意欲（昭和7年生まれ210万人→昭和23年高校入学約60万→昭和26年度大学入学約11万）【H5年度までは進学率30%以下】

# 高校進学率の上昇など新たな問題への対応とその結果

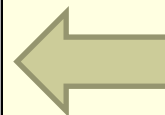
高校進学率90%  
(国民的教育機能  
関化と大学収容  
力低下)



全員が大学に行くわけ  
でない 画一的教育を  
する必要は無い

- 1.高校の多様化
- 2.高校の教育課程の  
弾力化(必修の削減  
と選択の幅の拡大)
- 3.大学入試の多様化  
と評価尺度の多元化

「普通教育の完成」と  
いう接続装置の解除  
⇒学力把握は一層入  
試の選抜機能に依存  
⇒少子化で機能不全





# もう一つの課題：普通教育 ⇨ 大学教育 — 知識基盤社会の要請 —

普通・一般教育を欠いた「専門家」は創造的で広い視野をもつ知識人にならない

⇒「知識人不在」の危険

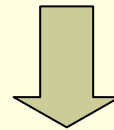
知識基盤社会では、融合領域、学際領域、異分野手法の応用が必要

⇒縦割りからは「二流の専門家」しか生まれない

普通教育の再建：基礎的教科・科目の学習の必要性

# 日本型高大接続の転換の必要

1. ユニヴァーサル段階での日本型接続の機能不全
2. 普通教育再構築の必要性



高校での基礎的教科・科目の履修と達成を促し、個別入試の限界克服を目的とするインフラとしての客観的学力把握の構築・導入

# 高大接続とテストの2類型

集団準拠型テスト：従来の選抜のための入試・センター試験 = 適切な差別化が基本機能  
選抜機能低下の中では劣化

V S

目標準拠型達成度テスト 欧米の教育上の接続に係るテストやTOEFLなどIRT型テスト = 教育上の接続に対応

高大接続に目標準拠型の達成度テストを

# 高大接続テストの骨格

- 基礎的教科・科目のカリキュラム・ベースでのテスト
- 高校生が複数回受験して目標を達成することを奨励（ACT、SATは年数回）
- 教科書から規準化された問題を繰り返し出題して基礎学力育成
- 多様な高校と大学が利用

これらは従来型のテストやセンター試験では実施困難⇒ 新しいテストの導入へ

# テストの標準化・等化の導入

- 古典的テストではなく、標準化されたテストを⇔アメリカのACT, SAT, TOEFL, 日本の医学系共用試験などではIRT【項目応答理論】を適用

1. 標準化された試験問題群(問題プール)から出題
2. 異なる問題セットでも難易度を同一にして評価

⇒①全国一斉の試験実施、基礎的問題の出題困難、複数の試験間比較の困難、問題のウエイトの適否の検討などを避けることが可能、②長期実施でテストの機能は安定化、③CATで効果は増加(将来)

# センター試験との関係は？

- ①「基礎的達成度を測る」と「公平な選抜資料を提供する」: 2つの目的の間の緊張  
⇒平均を60点程度にするなど「集団準拠型」の制約⇒教科書から出題などが困難⇒現行では新たなテストとなりえない
- ②現行センター試験と高大接続テストの併存は合理性・受容性を欠く⇒後者導入を前提の改革の必要性



## 大学入試センターの新たな役割

1. センターの蓄積を生かした高大接続テストの構築
2. 共通の論述式2次試験の作成など入学者選抜改革に対応

# テストの導入で変わる教育と選抜

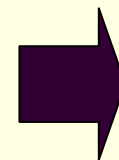
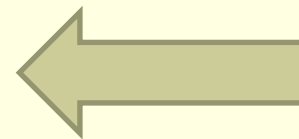
高校：①高大接続の学習目標に照らしての基礎的教科・科目の普遍的学習の実現、②多様な入試に振り回される教育・進路指導からの脱却 ⇒ 大学に接続する普通教育実現

大学：①「調査書、論文、面接、書類などを利用した選抜」導入、②一部大学で入試が残るにしても論述式の少数科目入試、③初年次教育の指針⇒イギリスやアメリカに近い選抜制度・1点刻みの選抜から広い意味での学力重視へ

# 協議・研究報告の後は

政策合意を経て高大関係者による「具体化のための検討組織」の必要⇒

- ①テストの研究・開発
- ②実施体制と実施主体（専門機関）の検討



数年後の導入へ

国における改革の検討  
⇒  
高大関係者による検討組織形成と運営への支援



# 高大関係者による研究開発の諸課題

1. 教育目標と科目の設定
2. 期待される達成水準＋CAT<コンピューターで難易度を変えて出題>を目指すが、PBT<通常の問題紙使用テスト>では複数のレベルを設定するか否か
3. 実施時期と回数
4. 標準化されたテスト開発とスコアの設定
5. マークシート方式の弱点の克服
6. 問題プールの形成
7. 試行テスト(実証研究)

# テストが提起する問題群

- ① 高大接続テスト(仮称)は、高大接続のための教育改革の一環だが、「すべて」ではない⇔課題のすべてに応えるテストを展望することは、テストの失敗を導く⇒テストを契機に、初等中等教育と入試制度の改革を
- ② 知識基盤社会は、一部の難関大学と進学校だけでは維持できない:「やせ衰える高等教育」と「底が抜ける高校教育」には未来はない
- ③ 国公私の高校・大学全体が「合成の誤謬」を避けて、テストと改革の実現を

以上